

我々の現代の痛みを克服しようと発展して来た釜山。歲月の痕跡ごとに熾烈な生活の歴史が傷跡のように刻まれている。由緒あるチョリャン（草梁）洞のくねくねした路地を登っていくと、日本から渡って来て祖国を守ろうとした彼らを祈念する空間が現れる。生い茂った雑草が歲月の無情を表すようだ。色褪せた写真の中の主人公たちは誰なのか。

「血管が5ミリも浮き上がって来るまで、そのように、耳が、左耳が聞こえなくて、火薬の臭いがして、銃弾に火薬、、、耳がこのようになり大変苦勞しました。これは本当に問題です。誰かこれを記憶してくれる人がいたらどんなに良いでしょう。」

「手榴弾の破片を受けてここも今でも傷があります。ここに。自分は作戦を多くやったので部下が死にました。でもその魂の慰勞を出来ずにいます。」

71年前、大韓民国の運命が危ぶまれた時、海を渡り、気高く戦中の砲火の中に飛び込んだ600余名の在日学徒義勇軍。彼らの英雄的な足跡を追う。

<タイトル>在日学徒義勇軍 砲火の中へ

釜山チョリャン（草梁）洞、建物の間を抜け急な階段を登るとゆったりとした静かなお堂が迎えてくれる。

韓国戦争当時、避難民の安息の地だった少林寺。当時16歳くらいだったチュジ僧侶は戦争の悲惨さを傍で見守った。

「戦場に行って来て、怪我をして来たり、手もこのくらい無い人もいたり、足が片方ない人もいたり、ともかく体が不自由になった人が多かった。健康な人より。その人たちが一番最後までここにいたと思う。」

韓国戦争当時、釜山は押し寄せる鳥のように、行き場のない避難民たちでいっぱいだった。当時の大僧侶は、彼ら全ての面倒を見た。

「3階をみんな使っていたようだ。彼らが身を寄せていたのでしょう。そして本堂の軒先に板でつい立てをして分けてただ住んでいたんです。」

チュジ僧侶は日本から来た参戦者たちの姿が特に目に浮かぶという。彼らが疲れた体を癒しながら一步ずつ登った海辺の丘。海の向こうの家族を懐かしがるが、死の選択に少しの後悔もなかった者たちだ。

<北韓軍 南侵 1950年6月25日>

1950年6月25日、北韓の南侵で始まった韓国戦争。3日でソウルは陥落し、李承晩政権は無効だった。新聞の号外などを通して祖国の危機を知った在日同胞達は大騒ぎになった。

朴ウンウク（박운욱）在日学徒義勇軍会長は、当時日本大学工学部1年生だった。

「号外が、韓国38度線が崩れた。以北軍が韓国に南侵、南侵！そのように大きく出ていました。友達から電話がありました。こんな事故があったのを知っているか？私も今聞いたんだ、と。我々が黙ってははいられない、会わなければならない。」

国のない悲しみと差別を身にしみて経験した韓国の青年たちが再び祖国を失うわけにはいかないと立ち上がったのだ。

「我々の祖国があのようなになったから、母の国だと考えているから、我々も銃を持って、あちらに侵犯した奴らをやっつけよう。そんな気持ちしかなかったです。仲間と戦争が起きたから祖国を救おうと」

<日本・東京>

解放後、理念の葛藤を経験しながら共産主義に対する反感が高かった青年学生たちが集まった。

「明治が一番多く、次は早稲田、その次が日大、そして慶応、法政。それらの学校が多く、東京で多く、大部分が青年たちが来ました。」

ナジョンナム（나종남） 陸軍士官学校 軍事史学科 教授

「大韓民国を支持する韓国人たちが総決起する決起大会が6月29日実施され、そこに留学生たち中心にそして若い青年たち中心に志願兵を祖国に送ろうという最初の提案があり、そこに多くの学生、そして在日同胞たちの中にも多くの方々が加担して在日学徒義勇軍が結成されました。」

不利な戦況でも参戦する意志はくじけなかった。韓国学生団体が国軍支援を決議して参戦を決めた。参戦義勇軍を募集した。日本の言論も韓国人の参戦の熱気を相次いで報道した。

<朴一 大阪私立大学 政治経済学部 教授>

在日学徒義勇軍同志会が編纂した「6・25戦争参戦史」
青年学生たちの決議証言を確認することができる。

家系が途切れることは一つの家不幸であるが、国の運命が途絶えたとしたら我々民族全体の不幸だと考えました。それで父が寝ている間に家を出て米軍の訓練所であるキャンプモリに向かいました。(在日学徒義勇軍 シンヒョグン 回顧)

日本の教授たちも戦争に狂って暴れた日本帝国主義者たちも工学徒たちは戦場にせき立てないと言いながら丁重に私を引き止めたんです。必ずしも銃を持って戦うだけが愛国か？と。しかしすぐに祖国が倒れるかもしれない場合なのでそんな言葉は私の耳には入ってきませんでした。(在日学徒義勇軍 ヤンオクリョン 回顧)

イムヨンオン (임영언) 朝鮮大学国際Tea&Coffee文学学科 兼任教授

留学生たちは直接血書を書いたり、祖国のため参戦しなければならない、と積極的に民団にアピールもし、米軍にも手紙を送ったりもしました。米軍の許可を取らないといけない状況でしたので。

身体検査などを通過して選抜された人員は642名。東京139人、大阪61人など、韓国人の住む地域から志願者が相次いだ。20代が527名と大多数だったが30代以上も71名にもものぼった。

彼らは9月12日から約2ヶ月間、5回に渡り遠く海を渡って参戦した。

東京中心の第一陣78名は横浜港から仁川港へ、大阪中心の第2陣、266名は横須賀港から仁川へ、日本の全域から集まった3陣101名は横浜港から仁川へ向かった。

第4陣145名は佐世保港から釜山へ。第5陣55名は小倉港から元山(ウォンサン)に上陸した。

ナジョンナム (나중남)

「5陣は独特で日本で約45日以上、言葉通り初めて基礎訓練を体系的にさせ、この人たちは最初から米軍部隊に配属させる計画でした。だから始めから元山港に上陸しました。米3師団が東海岸ですっと進撃をしていたので3師団とともに配属され初期の作戦、のちに中国軍との戦闘にも参戦する大変な困難を経験されました。」

1、2、3、5陣は米軍に配属された反面、4陣は身辺教育を経て国軍第9師団に配属され、白馬高地戦などへ参戦した。

1950年9月8日、学徒義勇軍第一陣に米8軍訓練所入所、壮行会が開かれた。12日夜、簡単な訓練を終えた志願者たちに移動命令がくだった。

<日本・横浜>

東京湾、横浜港、第一陣78名はここから米第7師団兵力1500名が乗っていた輸送船に乗り込んだ。

我々がどれほど差し迫っていたかと言えば、私が日本から韓国に出て行くとき仕方なく下宿の荷物も片付けられずそのまま置いて出てきたのですから。それほど我々は他のことを考える余裕さえもなかったのです。(在日学徒義勇軍 チョヨンジン 回顧)

「義務はないでしょう。何の義務もありません。韓国政府から来いという言葉もなく、軍人になれという事も無く、我々が自らした事だから。しかし一つだけ、祖国愛でやった事で、国を忘れることが出来ず、韓国戦争に行きたいという信念で行ったのです。」

<仁川広域市>

引き潮の時に現れる広大な干潟。潮の干満の差が大きく船の侵入が難しい。71年前ここで5千分の1の確率であった上陸作戦が繰り広げられた。1950年9月15日午前6時30分、集中砲艦射撃で始まった作戦名「クロマイト」。

海岸の防御戦を崩しながら3方向から上陸したUN軍は24時間で仁川市街地を奪還した。学徒義勇軍1陣は16日午後、仁川に到着し、米第3編纂基地司令部隷下の舞台に配属された。

「1次、2次は月尾島に上陸しました。船から降りて上陸し、月尾島で二日寝ました。富平アスコムシティキャンプ、アメリカのキャンプが補充部隊ですがここに入って来ました。見ると戦車、以北軍の戦車が真っ黒に焼け焦げて何十台が壊れて以北軍は全滅しました。」

米海軍基地が位置する横須賀港。在日学徒義勇軍第2陣、266名はここから9月24日に出発し仁川に上陸後、米軍各部隊に分散して配置された。

「この米軍師団は韓国の地形や状況を知らないし、韓国をよく知りません。それでどうすればこの問題を解決できるか悩みましたが、在日学徒義勇軍も事実上そのような脈略で米軍には魅力的な存在でしたし、しかも学力が高い者たちでしたので英語が出来る方が多かったです。」

米軍は在日学徒義勇軍を戦闘より、通訳や案内人として活用することに重きを置いた。

「銃も無く行軍なのに歩いたり走ったり、1日3時間、そんな行軍です。それ以上銃もなく、何も無い、軍服だけ着せて行進だけさせたんです。」

どのくらい訓練を受けましたか？ だいたい。「約4～5日」

戦闘現場に送ってくれという声が高まった。

北韓軍と直接戦わせて欲しいという嘆願が日系アメリカ人将校の小沢中尉を動かした。

ソングュソク (손규석) 国防部 軍事編纂研究所博士

「小沢中尉が第2次世界大戦当時、イタリア前線に投入され活動した将校だが、単一部隊を通して同質性を確保することは結果的に戦闘力を倍加させることを知っていたんだと思います、小沢中尉が。だから在日学徒義勇軍のそんな心情を察して、10月30日から在日学徒義勇軍で構成された単一部隊を結成したんです。」

在日学徒義勇軍で構成された31独立歩兵大隊が編成されたが、一度も戦闘をしないまま解体された。

「隊員たちも'本当にこれからは戦闘らしい戦闘になるんだな'と希望に満ちていたのですがこの時中国軍が介入して来ました。最前線に出ていた米軍が撤収することになったでしょう。それで理由はわからないが撤収の過程で31独立歩兵大隊が解体されました。」

悲運の31独立歩兵大隊の存在は数十年のちに世に知られた。

1977年5月10日カリフォルニア州議会が採択した決議案。

「彼ら韓国人義勇軍はよく訓練をされた戦闘部隊だった。米陸軍予備役中佐ジミー小沢が31独立歩兵大隊を編成し訓練させた指導力と日本に家族を置いて米軍とともに戦闘に参加した勇敢な韓国人義勇軍の再会を高く称賛するところだ」

1977年5月10日カリフォルニア州議会決議案

仁川上陸作戦で孤立した北韓軍は急激に瓦解した。淀みない北侵と38度線の突破、先発隊の鴨緑江到着、その秋の統一が迫っているように見えた。在日学徒義勇軍第3陣が所属する米第7師団は仁川から利原（イウォン）を経て中国のすぐ手前の恵山鎮（ヘサンジン）まで進撃した。しかし中国軍の全面参戦により戦況は混沌とした。人海戦術はUN軍をひどく苦しめた。

「榴弾が行ったり来たりして、はじめ耳が聞こえず耳が。火薬の臭い、鼻に火薬の臭いがして。私の耳がよく聞こえないのは軍に行き行って聞こえなくなりました。当時在日学徒義勇軍には階級がありませんでした。それまでただこれだけあってニックネームだけあって、名前だけしかありません。軍番も無く。」

機甲火力は酷寒で無力化し、凍傷被害者が続出した。

朝起きてみると雪が4～5メートル積もっていて砲撃をしても爆発しませんでした。どんなに撃ってもただ雪の中に入って爆発しないくらい寒かったのです。

（在日学徒義勇軍 キムジェセン）

「北側に上って行くので途中で古土里（コトリ）、長津湖に行く道沿いに古土里がありません。11月、確か15か16日？15日だったか？雪が山にたくさん降って、相当寒かったです。」

1950年11月末から12月初旬まで約2週間熾烈に展開した長津湖の戦闘、米第一海兵師団は長津湖の北側から中国軍第9兵団隷下の7つの師団に包囲された。海兵隊は空中撤収を拒否して7～8倍も多い包囲網を強靱な精神力で突破し咸興地域に撤収した。米海兵隊の死傷者7千余名、中国軍死傷者3万7千から6万名と推定される。長津湖近郊で圧倒的な兵力で中国軍と戦った米第7師団等の犠牲も少なくはなかった。

「長津湖戦闘で最も多い被害を見たのは米海兵1師団だが、その横で戦闘したのは第7師団です。この第7師団ですがそこに在日学徒義勇軍が多く参与していたのでそこで戦死者が多く発生しました。」

在日学徒義勇軍同志会は当時米7師団に配属されていた120余名の中で83名が失踪、犠牲になったと試算した。長津湖戦闘以降、咸興、興南に集結したUN軍10万余名は避難民10万名を引き連れて大規模撤収作戦を成功させた。

「民間人がいました。民間人が10万名もいたら船がどうなりますか？
'うわあ、ここまで来たのに、撤収しろというのか。負傷者や戦死者をどうしようというのか？凍傷者が30%以上も凍傷なのに、この人たちをどうしようというのか」と米軍少将も大変な苦勞でしたよ。

興南撤収作戦成功の背景には、長津湖戦闘を行った米海兵隊の英雄的な犠牲があった。中国軍第9兵団を長津湖付近にとどまらせることで、東北戦線の他のプレイヤーたちを成功裡に再集結させることが出来た。中国軍第9兵団が米海兵隊を短期間で倒して西部戦線の第13兵団に加担していたら米第8軍は大変危険な状況であった。しかし米海兵隊の大きな破格を受けた第9兵団は数カ月間参戦できなかったことで、UN軍は再反撃の時間を稼ぐことが出来た。

<文在寅大統領、米軍長津湖戦闘祈念碑訪問 2017年6月29日>

長津湖戦闘での米軍の犠牲は韓米血盟の象徴として残った。

文在寅大統領は2017年米国訪問当時、最初の日程として長津湖戦闘祈念碑から訪問した。

「大韓民国は皆さんの両親の犠牲と献身を記憶しています」

興南から釜山に撤収して故郷の家を訪問した朴ウンウク会長。その時を思い出すと心が痛む。

「家に帰って私も嬉しいと思ったんですが、皆私を見て泣くんです、家族が。なぜ泣くのか、息子一人を助けようと日本まで送ったのに、戦争に、軍に行つてこうなった。なぜ日本で勉強しないでなぜ韓国に来た？と泣きました。何も言えませんよ。私はそのように思わず、来たのに嬉しいと思って来たのに、ただ泣いていました。それで互いになだめながら、慰勞しながら、3日間そのように過ごしました。」

中国軍の大攻勢以降、米軍は一部部隊を日本に撤収させた。1951年2月 所属米軍が日本に撤退した在日学徒義勇軍51名は、貨物船で釜山に戻り陸軍下士官学校に入った。米軍に所属する別の20余名は初級将校を育成する陸軍総合学校22期に入った。

後日、在日民団団長として活躍した朴炳憲先生も入校した。息子の朴サンギュ、日韓親善協会中央会理事、回顧録を準備しながら亡き父がなぜ祖国のために険しい道を選択したのか、深く理解するようになった。

「父はだいたい80年以上を生きながら、ほとんど全て日韓関係と関連した活動をしていました。全ての始まりは在日学徒義勇軍からではなかったでしょうか。祖国は日本ではない、韓国だと。いつか韓国に行って何かをしなければならない。そのような希望を心に抱いていたのではないかと考えます。」

正式な国軍になった学徒義勇軍は高地戦などの厳しい戦闘地に本格投入された。

「51年度5月以降にほぼ今の休戦線に準ずるラインで両者対峙状況が始まった。いわば高地戦の始まりです。ですからある高地から突撃戦を繰り広げ高地を占領すると、夜にまた中国軍がよく知られる人海戦術を繰り広げ登ってくるとまた追われて降りて行かねばならない、そのような大変人命喪失を強要する消耗戦がずっと続きました。」

「学徒義勇軍出身者の中で学力も高く、とても鋭く賢いリーダーシップがある者たちには分隊長以上の職責を与え軍に活用されたでしょうが、戦闘任務中に初級将校または初級幹部をしていたならば、大変な犠牲を経験した可能性が大きいです。」

チョヨンガブ 前在日学徒義勇軍同志会長、義勇軍2陣で参戦した後、国軍少尉として激戦を繰り広げた。武功勲章を受けた戦争の英雄だ。激烈だった高地戦のど真ん中で死線を往来した。犠牲になった戦友を思うと今も息がつまる。

「私の部下が一人、その村はミョンパリです。そこから捜索に出たが、待ち伏せしていた敵にやられて死にました。その部下を思うと。捜索を多くしたので部下が死にました。その魂を慰労できずにいます。」

中部内陸の肥沃な穀倉地帯、戦争の傷跡を秘める江原道鉄原。平野にそびえる白馬高地。海拔395メートルに過ぎないが中部戦線の心臓部、鉄の三角地帯を守る戦略的要衝地だ。

「左側が西部戦線、右側が東部戦線ですが中部戦線全体で見ると左側に該当するが、現在ファサルモリ高地が中部戦線の左の中軸になる所なのです。ここを逃すとあの後ろがコデ山、あの大きな山がコデ山ですが、約7～8キロメートル我々が事実上撤収しなければならない状況です。」

1952年秋、ここで国軍第9師団は中国軍第38軍隷下の3つの師団を相手に激戦を繰り広げた。

<映画 高地戦>

近接戦闘が行われる高地戦の勝敗は戦闘兵にかかっている。

「火力支援というのは遠くから支援するので正確度が落ちるときもあり、ともすると味方に落ちる場合もあるし、また現場では小銃、手榴弾、大剣、身一つが動員されるいわば白兵戦、至近距離の近接戦で典型的で代表的な戦闘がまさに白馬高地戦闘です。」

中部戦線で戦闘したチョヨンガプさんは高地戦での惨状を90歳を過ぎた今も鮮明に記憶している。

「血の稜線から加七峰（カチルボン）、加七峰とキムイルソン高地とは繋がっています。そこで手榴弾の破片を受け、今もここに傷があります、ここに。夜に交代、陣地交代をしに入っていくときに何かを踏んだんです。こうしてしゃがんで見ると、死体です、死体。敵と味方の死体がそこにあって。」

両軍が砲弾数十万発を浴びせ、葉莢は膝まで積もった。約10日間進行した12回の熾烈な交戦の末、白馬高地は国軍の勝利に終わった。初めて中国軍を単独で撃破した。

「天文学的な価値がある勝利だと考えますが、一旦はこの地域を地理的に掌握したので中部戦線だけでなく西部戦線まで安全を与えたことは当時の戦況に大変重要な役割をしました。政治的にも大変重要な意味があります。当時韓国軍の地位、または今まで韓国軍に対する米国やUN軍の信頼、そんなものまで影響を及ぼす象徴的な戦闘と言えるでしょう。」

国軍死傷者3000余名、中国軍死傷者1万5千余名、両軍とも多大な人命被害を残した。当時9師団には釜山で身辺訓練を受けて配置された在日学徒義勇軍第4陣1000余名と米軍所属だったが国軍将校と副士官として志願した在日学徒義勇軍が配置されていた事が知らされた。

相当数が犠牲になったように見えるが、正確な数字は残っていない。

「特に白馬高地戦闘で戦死したと推定される方達は皆、一等中佐、二等中佐、そのような人たちですが、その者たちの名前は国立顕忠院やまたは彼らの名簿に漢字まで一致することを見るとまさに在日学徒義勇軍の方達ではないかと思われれます。」

在日学徒義勇軍は韓国戦争の期間、国軍と米軍所属として数多くの戦闘に参戦した。在日学徒義勇軍の参戦者642名中、135名が戦死した。

「80余名は戦闘間に失踪処理がされました。失踪した状態でしたがこれは後に95年度に戦死として処理し、それで135名が最終的に戦死者として確定されました。」

<国立ソウル顕忠院>

犠牲者たちは長い間祖国に埋葬されなかった。1963年日本、東京の寺社に祀られた戦没勇士52名が本国に送還され国立墓地に安置された。

<国立望郷の丘>

1981年、天安の「望郷の丘」は戦後亡くなった在日同胞や海外同胞のための専用墓地として造られた。

<休戦協定締結>

1953年7月27日休戦協定が締結された。在日学徒義勇軍の一部は国に残った。戦争期間、または戦争が終わった以降に軍の礎を定立するのに寄与した点です。在日学徒義勇軍は大学や専門学校以上の学力を持った人たちが一定数軍に残り、将校や下士官として服務しながら軍を様々な面から改善したり、向上させるそんな役割を遂行されました。

在日学徒義勇軍の中で転役者は、負傷などの理由で1951年から出始めた。彼らは釜山の少林寺に集まり日本への帰還をしきりに待っていた。

「全部バラックの集落でした。今のように建物はなく、全てびっしりとくっついている家で、瓦葺きの家でした。こんな建物もなかったし。ここから見ると海がよく見えたから、その隣が埠頭じゃないですか。船の汽笛が一日に何度も鳴るじゃないですか、だから彼らはどんなに懐かしかったでしょう。」

1951年9月連合軍と日本のサンフランシスコ講和条約、翌年4月に主権を回復した日本は在日学徒義勇軍の参戦者たちの入国を阻止した。

「日本ではノー、パスポートを持って来いというのです。お前が勝手に出て行ったので我々は知らない。だからどうしますか。将校出身の3人が行って挑戦しましたが、お前を救済することはできない、ということだ」

「サンフランシスコ講和条約が締結され在日同胞たちが元々の国籍、すなわち韓国国籍に戻ったので、以前に日本に帰った人たちは帰還したのですが。サンフランシスコ講和条約発効以降、韓国国籍の人たちは当時日本に行けない状況だったのです。」

生活は不安定だった。軍服をそのまま着て歩くと身体検査など検問を受けるのが常だった。米軍に所属した参戦者たちは日本に帰ったが国軍に所属した242名はついに帰れなかった。

「日本にいる家族たちとも別れねばならないし、本人が一人で参戦しに来たのに特別な縁故地もないそんな状況なので生計を維持するため色々な仕事をするしかない状況でした。」

残った者達は生存のため手当たり次第に仕事をした。

「大変に苦労しました。古物をリアカーに積んで坂を登って来たので、大変ですよ、イテウォンの坂道を。学生が「おじさん、ちょっと押してあげましょうか？」と押ししてくれたのが本当に有難かった。」

「根本的な生計対策もなかったし、全般的に大変な状況を過ごしていたが実際にこの方たちに対する名誉回復や生活支援が可能になったのは、軍事援護法というのが制定されたからです。それで就職斡旋をすることになりました。」

休戦15年後、1968年、政府は在日学徒義勇軍を国家有功者に認定した。

<日本東京>

帰って来れなかった参戦者達を記憶するものは多くない。在日韓人歴史資料館、1960年代の資料から在日学徒義勇軍関連の記録を探ることが出来た。

在日学徒義勇軍642名中、総515名の入隊日と除隊日、所属部隊や軍番、参加した戦闘について詳しく書かれています。韓国国内に199名、日本に再び帰った方248名、戦死した方68名。

当時の参戦者達の、切実な祖国への愛情を見せてくれる資料達。

再訓練の請求書、負傷して1951年に帰還しましたが、回復したのち再び入隊を望んでいるという請求書です。このように手紙を送ったのです。

ご覧いただければ、母親が日本人で父親が韓国人です。しかし私も韓国人の中の一人です。だから祖国を想う気持ちは他の人に負けないです。

このように在日学徒義勇軍の参戦者達は絶え間なく祖国の為になる仕事を探した。

<朴一 教授>

海を越えて祖国の戦場に向かった在日学徒義勇軍は後世の者達にどんな意味で記憶されているか。

安ユサンさんは韓国食材を日本に輸入販売する会社で働く。今日は新しく買ったキムチを入れるので忙しい。

「今は、韓国からキムチが到着したので移動させて冷蔵庫へ入れる作業をしています」

幼い頃家族とともに祖国を離れたが、母国語を自由に使えるのは特別な経験のおかげだ。

「2007年、入隊した後水防士第56師団工兵大隊に勤務して2009年に除隊して日本に戻りました。」

日本の永住権者として兵役免除が可能だが喜んで祖国の軍サービスを志願した。軍服務中に出会った良い人たちとの縁も日本に戻った後も続いている。

「ヒョン、お元気ですか？」 「部隊が移動して引っ越したんだ。韓国に来たら会わないとね、近くにいるのに会えないね。」 「空軍の飛行機で来ればいいんじゃないですか？」

「海外に住みながら多くの、自分自身に対する認識や韓国で生まれて韓国人としてのアイデンティティ、そんなことも考えながら、良い経験だと思い軍隊に行きました。」

兵役義務がない日本人の友人達はどう考えているのか。

<おくやきゆうすけ 友人>

海を越えて入隊したユサンさんにとって在日学徒義勇軍の意味はより格別である。

「この方達、先輩達はあえて行かなくていい戦場に、そんな状況でも先輩達の心の中にある愛国心、そういう行動を尊敬します。」

そんな状況が起きたとしたらユサンさんは軍隊に行くと思いますか？

「かなり悩むと思いますが、私はい、行動を起こすと思います」

71年前、在日学徒義勇軍が悲壮な第一歩を踏み出した仁川。この激戦地を見下ろす場所に仁川上陸作戦記念館がある。戦争の記憶を思い起こさせる映像、古い軍靴や錆びた鉄かぶと。在日学徒義勇軍を抱く色あせた太極旗。今の我々の平穏は先に逝った者達の血と犠牲の結果にあることを見せている。

「国家は軍人達、軍隊が守るのは正常なことでしょう。しかし国家が危機に処した時、軍隊がもう国家を守れなくなった状況の場合、国民が立ち上がって守らないといけません。在日学徒義勇軍の場合、日本からでも危機に瀕した祖国を救うため、命を掛けると考えた方達が参戦したそんな事例ですから。果たしてここから我々が何を学ぶことができるのでしょうか？まさに、愛国心、国を愛する精神、犠牲心、そんなことではないでしょうか。」

朴ウンウク在日学徒義勇軍会長が同志達に会いに来た。生存者はもう国内3名、そして日本に3名、戦争の記憶は苦痛であるが、国のための選択に後悔はない。

「白馬高地、金日成高地、その中部戦線で、戦争で亡くなった者達です。中部戦線、楊溝(ヤング)で戦死、このお墓はどこで死んだのかというと50年12月30日戦死。私の友達ですが、船に乗って釜山に戻って慶州、安東、忠州に行って」

振り返ってみると同志たちの命を想いながら休むことなく走ってきた人だった。

「同志よ、極楽に行っていてください。同志よ、極楽に行っていてください。どんなに苦勞をしたでしょう。君たちのお蔭で私たちはこのように生きています。君たちがあのようになければ、我々はどうして生きることができよう。君のお蔭で我々が生きています。」

老兵の願いはただ国が良くなることだけだ。

「国のために体を使おうと軍人になりました。軍人になってその泥水から榴弾が出てきて、敵軍と戦って。私がする話は、若い人たちがもっと良くなるようにしよう。もっと美しくしましよと。もう少し良い暮らしができるようにしましよ、我が国のために。」

「我々が守ったこの国がなくなることはないだろう。そのように考えます。国を信じます。若者達はむしろ我々より、もっと国を考えていることでしょう。」

<在日学徒義勇軍 642名>
大韓民国は皆さんを記憶します。